長野市立

博物館だより

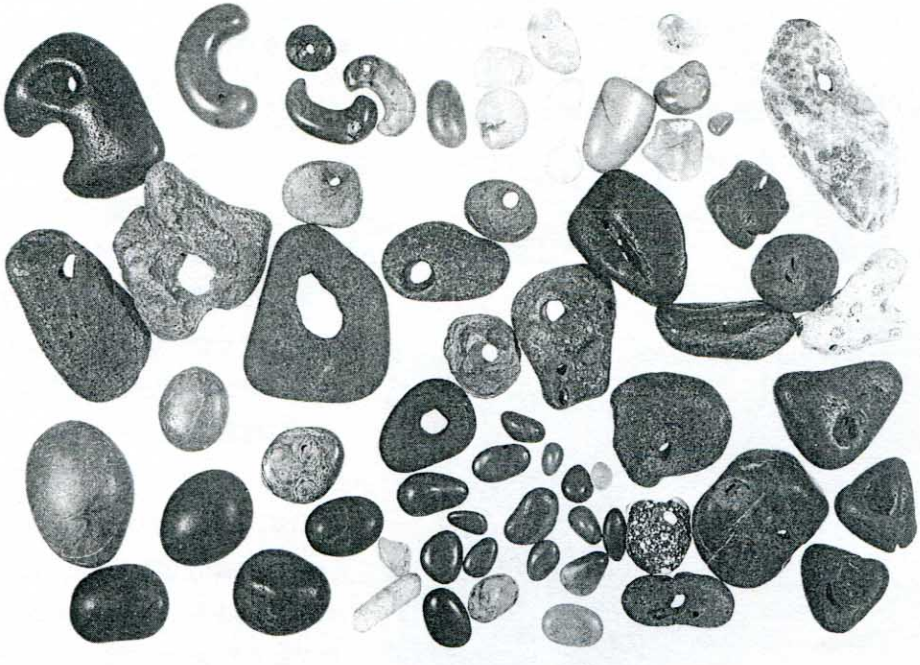
第37号

第38回特別展

豊かな実りを祈る

小正月の行事

開催される!!



▲年占いにつかわれた児玉石(長野市松代町西寺尾・頤気神社)　松代町東条の玉依比売命神社と同様、1月20日に頤気神社でも児玉石を数えることでその年の吉凶を占いました。昭和7年から22年まで神事の記録が残っており、当時は77個と記されていますが、現在は64個残っています。

第38回特別展

豊かな実りを祈る －小正月の行事－

平成8年9月21日(土)～11月4日(月)

米づくりが始まって2400年。人々は豊作を祈って、生活環境の変化が目まぐるしい現代にも、雨乞い・日乞い・虫送りなどを伝えてきました。

豊作を祈る行事は、「百姓の正月」などといわれる小正月に集中して行われます。たとえば、ヌルデやクルミを素材にしたケーノハシ（粥の箸）やケズリバナ（削り花）、アワボ・ヒエボ（粟穂・稗穂）、農具の模型などのモノヅクリや、小豆・粥などによる年占い、鳥追いなどです。

正月に行われる行事は、元旦を中心とする大正月と、15日を中心とする小正月に分かれます。古くは、満月の日（太陰太陽暦の15日）が1年の始まりといわれましたが、暦法が中国から入ってきたため、1年の始まりが新月の日（1月1日）に替わりました。ところが、農家にとって重要な正月行事は1月15日にそのまま残り、今日も行われています。

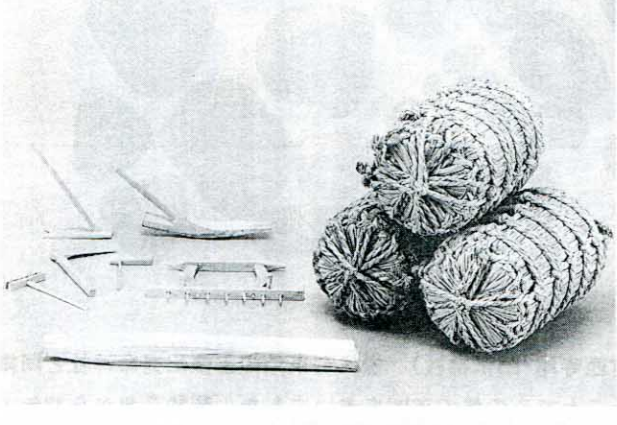
▲四季農耕図絵（山ノ内町宇木）

写真提供　渡辺保治氏

これらの行事のなかで、長野市周辺では農具の模型や小豆粥を食べる箸などをヌルデ・マツ・ヤナギなどの植物でつくりますが、県内を広くみると、クルミ・キブシ・ムラサキシキブ・ガヤ・ミズキなどさらに種類に富みます。いずれも、手に入りやすく、細工が簡単で木肌が美しい植物です。

今回の展示では、小正月の行事を中心に、300点余りの資料を県内外から集めて紹介します。このような祈りの造形を通して、自然と人間とのかかわりを見直していただけることを希望します。

（文責　辻浩子）



▲ケーノハシ、タワラなどのモノヅクリ（長野市芋井広瀬）

地域探訪『千曲川』その①

～丘陵の生いたちと延徳沖の洪水～

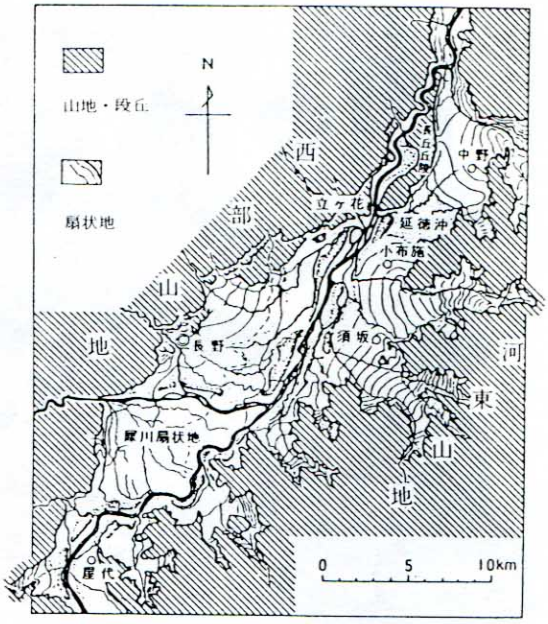
千曲川は、現在でこそ治水工事のおかげで大きな水害は少なくなりましたが、以前はたびたび水害を起こして人々を苦しめてきました。

立ヶ花の東側にある延徳沖は、長野盆地の中で最も標高が低い地域です。現在は広い水田地帯になっていますが、昔は洪水の常襲地域でした。それは、この地域が低地帯であることと、千曲川の川幅が立ヶ花のところで急に狭くなっていることが原因です。

ところで、立ヶ花周辺の地形と地質を調べると、おもしろいことに気がつきます。この地域の千曲川は、西側の豊野丘陵から東側の長丘丘陵にかけて広がっている丘陵地帯の中に割り入るように流れています。この丘陵地帯は、大地の運動によっていまでも盛んに隆起を続けている地域です。川は高いところから低いところへ流れるものですから、千曲川が延徳沖の低地帯を流れずに、隆起を続けている丘陵地帯を流れているのは不思議な気がします。

▲長丘丘陵と千曲川（中野市）

その理由は、長野盆地の生い立ちと関係しています。長野盆地は、数十万年前に始まった活断層の運動によってつくられたと考えられています。はじめの頃、この地域の千曲川は当時の盆地の西のへりにそって流れていました。その後、大地の運動によって立ヶ花付近の丘陵地域が隆起を始めました。しかし、丘陵が隆起するとそのぶんだけ千曲川の流れが川底を掘り下げるため、千曲川は流れる場所を変えずに同じ場所を流れ続けているのです。このように、私たちの周りの地形には、大地の歴史が刻まれているのです。　（文責　畠山幸司）



▲長野盆地の地形
「信濃川河系にそう礫層堆積地形とその意義－その３－」（井上春雄）より

※新しくなるプラネタリウム（その① ～さようならプラネタリウム～）

多くの皆さんに愛され、利用していただいた博物館のプラネタリウムが今年の12月１日をもってその役目を終えることになりました。開館当時、プラネタリウムとしてはコンピュータによる自動演出装置を備えた最新のものでした。番組も現行機種において最後となる「さようならプラネタリウム」で60作目になります。開館以来どんな番組が投影されてきたかは当館のプラネタリウム前の廊下にすべての番組のパンフレットを展示していますので、ぜひご覧ください。

プラネタリウムでは、一般の番組投影だけでなく、生解説の投影（星空の散歩道）や天体教室、星座教室、天体観望会、CDコンサート、ライブコンサート、講演会、また、理科教育センターでは市内の小学校５年生（現在は６年生）全員がプラネタリウムで学習をしてきています。

こうして、15年間延べ30万人以上の人に利用されてきたプラネタリウムも、老朽化と、進んでいく時代というふたつの波には勝てなくなり、新しいプラネタリウムにバトンタッチをすることになりました。でも、今のプラネタリウムは12月１日までは元気に活躍しますし、さよならイベントも計画していますので皆さんのご参加をお待ちしています。そして、新しいプラネタリウムがどんなものになるか、次号の博物館だよりでお知らせします。

＊現在のプラネタリウムの最後の投影　1996年12月１日(日)

＊改装工事のためプラネタリウム休館　1996年12月２日(月)～1997年４月25日(金)

＊新しいプラネタリウムのオープン予定　1997年４月26日(土)

▲長野市大字吉字山千寺
丸山保重氏他４名所有
（像高29.7cm）

特別公開　重要文化財　銅造観音菩薩立像

９月22日(日)～11月４日(月)
常設展示室２階「慈悲のまなざし」コーナー

長野市の北部、大字吉字山千寺に伝わる白鳳期（７世紀後半）の小金銅仏です。二重瞼のあどけない表情、丸みをおびた体つき、誇張された手足は童子の姿を連想させます。本体から台座までを一つの型から造り、像内は中空で、天衣など細部の文様も鑿で丁寧に仕上げられています。両手から下がる天衣の一部が欠けています。

山千寺は、日本海沿岸から善光寺平へ入る街道沿いの重要な地点に当たり、外来の仏教・技術などの伝来経緯を考えるうえで興味深い場所です。県内では、松川村の観松院の銅造菩薩半跏像（重要文化財）が朝鮮半島から日本海を通じてもたらされた渡来仏と考えられており、古代の信濃を考える上で、これら小金銅仏は重要な位置を占めています。

（文責　降幡浩樹）

博物館だより №37　1996.9.13
編集・発行　長野市立博物館
〒381-22 長野市小島田町１４１４
☎ (026)284-9011